2022 年 6 月 2 日放送

使ってみよう歯科口腔領域と漢方⑤

各論:口内炎に半夏瀉心湯/黄連湯/茵蔯蒿湯

東京大学大学院　医学系研究科　イートロス医学講座

特任准教授　　**米永一理**

（2024 年 4 月より　日本大学歯学部　摂食機能療法学講座　主任教授）

第 4 回の『漢方薬の使い方と副作用』は如何だったでしょうか。私の担当致します漢方トゥデイでは、漢方初学者の方向けに、歯科口腔領域の漢方薬を使えるようになることを目的としてお話をしております。第 1 回から第 4 回は総論をお届けしました。

第 5 回からは、いよいよ各論です。各論では薬価基準による歯科関係薬剤点数表に収載されている 11 種類の漢方薬を中心に解説致します。

各論の 1 回目として『口内炎に半夏瀉心湯/黄連湯/茵蔯蒿湯』と題し、お届けします。

ではまずは困った時の次の一手としての漢方薬についてお話をします。

日常診療において、口内炎の治療に難儀されている先生も多いのではないでしょうか。特に高齢社会となり、抗がん剤治療をはじめ、様々な全身疾患に併発した口内炎や、よくわからない舌痛症を訴え、口腔心身症として経過観察している場合もあると思います。そのような場合、口腔管理をした上で、起因となりえる状態を改善し、その上で軟膏や含嗽剤などを処方することが一般的です。しかしながら、これらは対処療法であり、効果がなかった際の次の一手に困ることがあると思います。このようなときに選択肢になるのが、漢方薬です。

ではさっそく半夏瀉心湯についてです。

まず口内炎など口腔内の粘膜症状に対して、最も便利なのが半夏瀉心湯です。そして、漢方

薬を導入したことのない先生方にまず何か１つをお勧めするとしたら、この漢方薬です。
半夏瀉心湯は、もともとは胃腸炎の薬でもあり、生体内の様々な粘膜の状態を整えてくれる作用があるとされています。さらに腸管に関連する心身症にも効果がある場合もあり、粘膜の状態が整うことで、心身のバランスが改善し、精神状態がよくなることがあります。例えば、過敏性腸症候群などです。

半夏瀉心湯の働きは、口内炎や腸管炎など、粘膜が荒地になってしまった状態に対し、芝生を生やして、粘膜をふかふかにし、補水してくれるイメージです。つまり、口内炎全般に使用することができ、舌が荒れたことにより起こる舌痛症をはじめ、口腔内の粘膜障害にも有用である場合があります。

半夏瀉心湯の効果を得るためには、全身投与だけでなく、局所に薬が行き渡ることが大事とされています。作用機序も解明がすすんできており、抗炎症作用として、プロスタグランジンE2 の産生を抑制する、口内炎の起因となるフリーラジカル除去作用がある、鎮痛作用や抗菌作用があることなどが報告されています。

よって、口内炎や舌痛症においては、効果を得るためには含嗽を行なった上でのみ込みを行うことが重要となります。これを含みのみと言います。含みのみでのお薬の使い方は、漢方薬は水には溶解しにくいため、お湯で溶かして使用します。私の臨床では、小さい耐熱性のペットボトルや水筒などに、漢方薬と、漢方薬が解けきる程度のお湯を入れ、攪拌する使い方をお勧めしています。これであれば、外出先にも持って行くことができ、疼痛があるときには適宜使用して頂くことができます。なおこの際、微生物が発生する可能性もありますので、漢方薬の溶解液は長時間の作り置きをしない注意も必要です。

半夏瀉心湯の使用頻度は、疼痛などの症状に合わせて増減して良く、1 日 3 包を目安とします。しかし、飲み込みをしない場合は上限にとらわれず使用することもできます。つまり、患者の自己調節に任せることができるメリットもあります。また半夏瀉心湯の止め時は、口内炎や舌痛症症状が治まり、患者が含みのみを次第にしなくなってきた頃となります。

含嗽時の注意点として、口内炎がひどい場合、含みのみ当初はピリピリとした感じを訴えることがあります。このような場合 3〜4 日ほど使用を継続していると症状が軽快してくることが多いです。そのため、ピリピリ感が強い場合は、慣れるまで溶解濃度を薄くするなどの調節を指導すると良いです。また、半夏瀉心湯は生薬として甘草を含むため、内服により、副作用で偽アルドステロン症になることがあり、血圧の上昇や下肢の浮腫を経験することがあります。よって、服薬が増えることを嫌う高齢者や飲み込みが困難な方への使用においては、含嗽のみの使用を薦めると良いでしょう。

次に黄連湯についてです
急性に発症したひどい口内炎や、難治性の口内炎には、黄連湯が適応となります。

黄連湯は、今まさに炎症が起こっている状態を、鎮めてくれます。つまり、火事になっている状態に対し、消火してくれるイメージです。荒地になる原因である火を消してくれるため、

まだ火が消えてなさそうな口内炎に使用します。
　勿論、粘膜が火事になれば荒地になるため、荒地に芝生を生やしてくれる半夏瀉心湯と組み合わせる場合も多いです。この際、黄連湯は半夏瀉心湯と違い、特に含嗽する必要はなく、内服だけで使用します。よって、まずは黄連湯を飲んだあと、半夏瀉心湯を含みのみすると、半夏瀉心湯の効果がより口腔内に残存し、効果的であると思います。
　また、口内炎の原因は、様々な微生物などによる外的要因であることも多いかと思います。このような場合は、薬価基準による歯科関係薬剤点数表には収載されておりませんが、黄連湯に解毒成分の入った、黄連解毒湯の方がより有用な場合があります。
　なお、黄連湯も生薬として甘草を含むため、半夏瀉心湯同様、偽アルドステロン症に対する注意などが必要となります。

　さいごに茵蔯蒿湯についてです。
　半夏瀉心湯や黄連湯以外にも、口内炎に茵蔯蒿湯を使用することができます。特に感冒など感染症罹患時におこる口内炎や舌痛症、および味覚障害の際に適応となります。
　具体的には、茵蔯蒿湯は、主に臓器の肝臓に関連する炎症に効果が期待できます。これは茵蔯蒿湯の含有生薬の一つである山梔子に含まれる Genipin に、ミトコンドリアの膜透過性遷移現象の阻害作用があり、これによる抗アポトーシス活性によると報告されています。つまり肝障害を抑制する作用があると言えます。
　この茵蔯蒿湯の口内炎に対する働きは、臓器の肝臓が人体の工場であり、この工場の状態を整えることによります。そうすることで、炎症を鎮め、粘膜を改善させるための材料を十分に供給してくれるようになるとイメージを持って頂けるとわかりやすいかと思います。
　なお、茵蔯蒿湯は生薬として大黄を含むため、食思不振、心窩部不快感、腹痛、下痢などの副作用に注意が必要です。

　以上、口内炎に対する漢方薬のイメージをまとめますと
　半夏瀉心湯は、炎症で荒れ果てた粘膜に芝生を生やしてくれるイメージ、
　黄連湯は、炎症を消火してくれるイメージ、
　茵蔯蒿湯は、炎症を鎮め粘膜を改善させる材料を供給してくれるイメージ、
　となります。

　ではお時間のようです。
　今回は、口内炎に対する漢方薬を中心にお伝え致しました。歯科口腔領域の漢方にさらに興味を持って頂けたでしょうか。本シリーズでは、続けてお聞き頂くことで、漢方薬の楽しさを感じて頂き、漢方を使って頂けるようになればと思います。次回は、各論の２回目として、口腔乾燥症、口渇に対する漢方薬を中心にお届けします。